大学図書館・研究図書館

Miyuki Yamamoto

▶ **To cite this version:**

Miyuki Yamamoto. 大学図書館・研究図書館. Société franco-japonaise des bibliothécaires et des documentalistes. フランス図書館の伝統と情報メディアの革新, 勉誠出版, pp.45-55, 2011. ⟨halshs-00742911⟩

HAL Id: halshs-00742911

https://shs.hal.science/halshs-00742911

Submitted on 18 Feb 2016

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire **HAL**, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

第４章　大学図書館・研究図書館　（歴史と現況）

リヨン東アジア研究所　山本みゆき

1　大学の歴史とその図書館

フランス大学図書館の歴史は浅い。パリ大学の起源は 13 世紀と古いが、その後各地に設立された大学には大学図書館と言えるほどのものは無かった。大学は多かれ少なかれキリスト教的基盤を持つ教育組織であり、古典文献など学問に必要な資料は教会や修道院付属学校の立派な図書館で閲覧するのがならいだったからだ。教会蔵書は質・量ともに外国の一流大学図書館のコレクションにも匹敵するほどだったが、宗教組織の所有財産であって公共資料というわけではなかった[1)]。

革命による旧体制崩壊まで存在していた 22 の大学 (universités) は 1793 年国民公会により全て廃止され、所蔵していたわずかな書籍・資料も教会財産(蔵書)とともに没収された。国民公会は大学のかわりに、実務専門学校としてのグランゼコール (grandes écoles) を次々に設立したが、これらは学術研究資料を必要としないとみなされ、当時学内には正式な図書館は設置されなかった。よく知られているように、今日もエリート養成一流校としてグランゼコールは大学と一線を画している。

大学がなければ大学図書館も存在しない。19 世紀後半に図書館を備えて大学は再生されるものの繰り返す戦争で荒廃する。戦争のたびに他国の優れた大学事情を知るなどして大学とその図書館の重要性は認識されるが、世界大戦下の半世紀は大学図書館よりも公立図書館が優先された。建物も蔵書も宝物のように保護され一般市民に提供されていた。戦争で数も減っていた大学教員や学生は公立図書館利用で十分と考えられていた節がある。また技術革新にともない戦時に有益な技術研究が奨励され、民間投資もあって技術研究所やその為の専門図書館が出現した。大学関係者も大学総合図書館より個人的要請に対応できる専門図書館を望む傾向があった。こうして大学図書館は数々の困難を耐え忍びながら献身的な司書の努力で命をつないでいた[2)]。

戦後になってやっと大学図書館の抜本的な改革がなされ、成果はあったものの今日でも諸外国に比べて遅れを取り戻せたかは疑わしい。フランス大学図書館の特殊性を浮き彫りにし将来への課題について考えてみたい。

2　大学図書館改善の軌跡

1945 年までのフランスには 23 の大学図書館があり（17 大学区に 1 館ずつとパリに 6 館）数少ない専任司書は一般図書業務に加えて雑務処理から書庫整理まですべての仕事を担っていた。大学図書館行政は高等教育局 (Direction de l'enseignement supérieur) の管轄だったが担当部署はもとより担当者もいない有様だった。戦後政策では国民の読書教育が重視され直ちに図書館公読書局 (Direction des bibliothèques et de la lecture publique : DBLP) が創設され、大学図書館もその管轄に委ねられて改革政策の恩恵に浴することになる。戦後は学術教育機関としての総合大学の重要性認識はゆるぎなく、それにともなう学術資料の必要性にも異議を唱える者はないが、経済的・社会的影響を受け大学図書館改善の道のりは平坦ではなかった。

2.1　図書館公読書局 (Direction des bibliothèques et de la lecture publique : DBLP)[3)]

DBLP は 1945 年に国公立図書館の改善と整備を目指して国民教育省 (Ministère de l'éducation nationale) に設置された機関で、各大学の図書委員会の要望に応えながら国家機関としての大学図書館改善を直接指揮した。DBLP のとった改善政策のおかげで 20 年間に 1 世紀の遅れを取り戻せたとよく言われる[4)]。国と地方に働きかけて十分な予算を取り、図書館施設の再建・新設を実現する。司書職の見直しを図りその地位向上に努め、図書館維持のための労働者雇用も増加する。司書ネットワークや図書館間の協力体制強化に努め、共通の書誌規則の整備、共同カタログ・外国雑誌の共同リスト作成、図書館間貸出しシステムも発展させる。しかしながら目覚しい改善成果と学生数の増加にもかかわらず、大学図書館利用者数は少しずつしか増えなかった[5)]。

2.2　専門図書館の増加－フランスの特殊性

1960 年代までに大学も次々と新設された。大学の増加と拡大は地理的には大学施設の分散を引き起こし、各大学に一つとされた総合図書館以外に専門ごとに細分化した研究図書館や資料センターが無秩序に多数出現した。1960－1970 年代に増加したこれらの専門図書館は、学部 (unité d'enseignement et de recherche : UER) や大学内

の研究所の直接運営で、ごく限られた利用者を対象とする閉鎖的な図書館だった。不況による予算削減の影響もあり、専門書部門は学部や研究所予算で図書購入が可能な機関に個々別々に運営されることになり、中央の総合図書館は一般参考図書提供と共同技術管理など特別なごく一部の機能に携わるに過ぎなかった。大小様々な専門図書館の運営総額が総合図書館のそれを上回ることもあった。フランスの大学図書館のほとんどは一般教養向けの中央図書館と散在する大小複数の専門図書館から成る構造で、諸外国の総合的な大学図書館と大きく異なっていた。

2.3　大学共同資料局（Service commun de la documentation des universités : SCD)

不況のあおりを受けて図書館予算が削減された 1970 年代ではあったが、だからこそ各図書館は協力ネットワークを充実させ情報処理面での近代化とサービスの拡大に努めた。協力体制が進展するにつれ、大学内の中央図書館と多種多様な専門・研究図書館の統合協力も望まれるようになった。

1984 年の高等教育に関する法(サヴァリ法)に基づき、1985 年 7 月 4 日の政令は大学図書館の新組織枠を打ち出した。大学共同資料局 (Service commun de la documentation des universités : SCD) の誕生である。大学内にあるすべての図書館と資料センターを統合し予算・人事雇用・技術開発など大学が一括して管理する仕組みである。大学の図書・資料管理が国家の手を離れ、各大学の自由運営になるという意味でも大きな変革だった。

中央図書館はそのまま自動的に SCD の管轄となり、専門・研究図書館は SCD へ統合 (intégré) するか、自立性を保ちつつ協力する関係 (associé) をとるべきとされた。「自立協力(associé)」とは、予算・人事管理をそれまでどおり研究所なり学部なりが独自に行うが、SCD からの施設・技術開発協力を得ることができるというものである。その代わりに所蔵資料の提供枠を少数の研究者だけでなく一般学生にも拡げるよう期待された。しかしその規定はゆるく曖昧で、多数の専門・研究図書館が閉鎖的性格を維持していた。研究者本位に築かれてきた図書館であるだけに、外部へサービスを広げる運営方針切り替えにはかなり抵抗があった。

2.3.1　SCD の改革成果

戦後の目覚しい大学図書館改善政策は 1970 年代後半から 10 年間ほど停滞し、SCD 登場後の 1990 年代に再び勢いを盛り返し今日まで続いている。1990 年代前半には、どこの大学の SCD も専門部門(図書館)との統合が進み改革政策の実現が捗った。『フランス図書館雑誌』(*Bulletin des bibliothèques de France : BBF*) は 2009 年 6 号 [6]で大学図書館特集を組み興味深い論文を載せている。中でも国家行政と大学図書館の関係を概観する Alain Collas 氏は過去 20 年の SCD の成果を高く評価している。「全国大学図書館サービス活動に関する統計」1989 年と 2007 年のデータの比較では、学生数　40%増、購入図書数 160%増、契約雑誌数 58%増、図書館面積 55%増、閲覧座席数　79%増と報告している。また情報のデジタル化が一般的になり電子資料の購入はもとより、情報配信技術への投資でネット上の総合カタログシステム(Système universitaire de documentation : SUDOC)[7]の開発がすすんだことを成果としてあげている。大学図書館開発への国家予算額が 4 倍に増えたとの指摘も国がその重要性を認識している証拠だろう [8]。

2.3.2　岐路に立つ小規模図書館

中央図書館が立派になるにもかかわらず、統合を望まない専門・研究図書館は依然として多く分散構造が解消されない。フランス会計院 (Cour des comptes) の 2006 年の報告には SCD に統合されていない専門・研究図書館の数が多すぎるとの指摘があると上記の Collas 論文は続ける。2008 年に発表された図書館総合監査 (Inspection générale des bibliothèques) の報告 [9]によると、SCD に統合吸収された図書館は各大学で平均 3 館にとどまり、SCD 以外の図書館資料の割合は大学全体の約 33 パーセントを占めている。さらに、SCD 以外の図書館の総合カタログ SUDOC 参加率は三分の一に過ぎない。統合へのスピードがこのままだとすると、大学が所蔵資料すべてをコントロールできるようになるまでに 30 年から 50 年かかると予想している。統合を望まない理由として人事管理と予算があげられている。専門・研究図書館の司書はそのままでは国家資格が必要な大学図書館員になれない場合がある。また、専門知識を持った司書を手放したがらない研究者が多い。こうした専門司書のポスト維

持が保障されなければ統合は難しい。予算面では、統合されてしまうとその専門分野への予算配分が不安定になるだろうとの危惧がぬぐえない。

しかしながら、以前は「大規模」専門・研究図書館とみなされたものも、SCD の躍進によってどれも小規模と言わざるを得なくなってきた。手狭になったスペースで書庫不足に悩む専門図書館は数多い。書庫拡張のために SCD への統合に踏み切る図書館も出てくるだろう。また、資料電子化の時代になり技術面でも資本面でも孤立していては困難だ。図書館分散化問題は国が強力に推し進める大学改革政策の波に乗って意外に早く解消されるかもしれない。

3　大学改革と図書館 - リヨンの例

1990 年代末から徐々に進められてきた大学改革は、大学だけでなくグランゼコールや公的学術研究機関すべての組織変容を引き起こしている。専門細分化傾向のあるフランスモデルを解消し、研究と教育を一体化させた万国共通の「大学」概念を取り入れようという発想である。筆者が勤めるリヨンの研究所図書館を例に現在進行中の改革政策と高等教育機関の図書館のゆくえを展望する。

3.1　東アジア研究所図書館 [10)]

リヨン東アジア研究所 (Institut d’Asie orientale : IAO) は現代極東アジア及び東南アジアをフィールドとする社会科学系研究所で、国立科学研究センター (Centre national de la recherche scientifique : CNRS)、リヨン第 2 大学、リヨン第 3 大学の協賛で 1994 年に設立した。図書館運営費としては 3 機関からの一般予算の一部に加えてリヨン第 2 大学 SCD からの予算を使うことができた。前章で触れたように、SCD 予算がもらえるのは統合図書館だけで、例えば SCD の協力図書館 (associée) が「例外的に」SCD 予算配分に与れるという規約はあるようだが、その場合は一般大学生への資料提供が前提とされる。当時の IAO 図書館は稀な例外を除いて学部生の利用は認めておらず、リヨン第 2 大学 SCD の協力図書館としての協定もなしに予算だけ享受していた。IAO 図書館は中国語・日本語などアジア言語の原書を取り扱い、特殊な資料を提供する例外的な図書館として優遇されたのかもしれない。このように SCD

発展途上の 90 年代は、統合・協力事情が曖昧な図書館が IAO に限らずかなりの数にのぼったと考えられる。

IAO はやがてリヨン第 3 大学と袂を分かち、高等師範学校 (Ecole normale supérieure : ENS)[11] 人文・社会学系の協賛を得て、2002 年 9 月にそのキャンパスに移転合流した。同校と CNRS を後見監督機関 (tutelle) とし、リヨン第 2 大学を協力機関 (partenaire) としてそれぞれからの予算で運営されるようになった。移転をきっかけにリヨン第 2 大学 SCD は IAO 図書館の実質的協力は無いと言う理由から予算配分を打ち切った。以来、ENS、CNRS、リヨン第 2 大学から出る研究所一般予算総額の約 50 パーセントが図書購入費に当てられるようになった。IAO 図書館の蔵書はすべて ENS 図書館の書庫に収められたが、ENS 図書館への統合はせず書誌カタログを始め運営業務も一切別管理だった。

3.2　大学改革政策による学術組織の変容

3.2.1　グランゼコール、研究機関、大学の連携協力

エリート養成のグランゼコール、研究活動のみの公的学術研究機関、学位を授ける教育中心の大学、これらの機関を連携させてその境界の壁を低く或いはなくすような改革が推し進められている。

ENS のリヨン移転もグランゼコールと他機関との連携協力を念頭に置いていた。IAO の後見監督機関になったのも研究機構 CNRS や大学とともに教育と研究をより充実させるためだった。ENS キャンパスに併設された図書館はディドロ図書館と名付けられ、その館内には ENS 図書館のほかに、大学間共通図書館 (Bibliothèque interuniversitaire : BIU) 、国立教育学研究所図書館 (Institut national de recherche pédagogique : INRP) も入り、ENS と BIU は開館当初から雑誌部門を共同管理にした。2010 年はディドロ図書館 3 館共同図書管理システム導入が実現し 9 月の新学期から共同ポータルサイト公開の予定である。書庫を提供してもらった IAO 図書館も 2007 年から ENS 図書館の正式な協力図書館 (bibliothèque associée) になり、新システム導入を機会にローカルサーバーから書誌データを合流させ、全国大学総合カタログ SUDOC にも参加できることになった。新システムは書誌カタログは共同だが、各

図書館ごとの管理設定が可能なので IAO 図書館も独自運営を続ける。しかし利用者の便利を考えれば各館のサービス条件を均一化せざるを得ず、IAO のようにこれまで閉鎖的だった図書館にとっては大変革となるだろう。

3.2.2　研究・高等教育拠点 (Pôle de recherche et de l'enseignement supérieure : PRES)[12)]

ディドロ図書館はモダンで美しい建造物だがその書庫には限りがある。IAO 図書館に割り当てられた書庫も拡張の余地は無く飽和状態である。書庫不足はリヨンとその周辺の大学図書館共通の悩みで、巨大な共同書庫（サイロ）建設計画の実現が待たれている。共同書庫建設案は 、地域ごとの複数学術機関が連携協力する研究・高等教育拠点 (Pôle de recherche et de l'enseignement supérieure : PRES) 形成によって具体化された。PRES は研究領域における大規模な協力体制を大学を中心に築くのが主たる目的だが、具体的な協力内容は PRES ごとに参加機関が自由に決定する。リヨンの PRES はローヌ・アルプス地方とリヨン地方の行政支援も受けて 2007 年にリヨン大学 (Université de Lyon)[13)] として形成され、現在リヨン周辺の国公立・私立大学約 20 校が参加している。図書館関連では共同書庫建設以外にも電子図書館構築や公立図書館との協力計画などにも取り組んでいる。

3.2.3　自治大学 (université autonome)

サルコジ大統領は就任後間もなく高等教育機関の改革に着手した。高等教育機関行政は国民教育省 (Ministère de l'éducation nationale) の所管だったが、高等教育・研究省 (Ministère de l'enseignement supérieur et de la recherche : MESR) [14)] を独立させその所管とし担当大臣が高等教育分野に専念できるようにした。2007 年 8 月に大学自治に関する法案が採択されこれに基づいて 2009 年 1 月に 18 大学、2010 年 1 月には 33 大学が自治大学となり、グランゼコールなどの 9 高等教育機関も自治が認められた。学長の権限は強くなり、予算 ・人事管理そして不動産管理も各大学の自由な運営に任される。大学の自治化と平行して、政府は大学施設改善施策 (Opération Campus)[15)] を進めており各地の PRES などから出されるプロジェクトを審査し予算配分などを決めている。リヨンでは、リヨン第 1 大学(自然科学専攻大学)、第 3 大学、

ENS de Lyon が自治大学となっており [16]、共同書庫建設は大学施設改善施策のプロジェクトにも採択されている。未だかつてなかったほどの巨額予算を投じて大学改善を目指しており、図書館を必要不可欠なものと重要視しているのは確かである。

4　おわりに　―　21 世紀のフランス大学図書館

第 2 次世界大戦終了までフランスの大学と大学図書館は正当な扱いを受けてこなかった。戦後の改善努力もなかなか実らない不遇の時期を乗り越えて、ここ 20 年ほどでやっと世界の標準に達したかに見える。大学世界ランキングの上位に食い込もうという野心的な現政権の改革政策は進行中で、その結果が明らかになるにはまだ少し時間がかかるだろう。その政策内容に賛否両論あるものの、大学図書館改善には役立っており、施設建設の具体的計画などには多大な期待が持たれていると言えよう。散在していた専門・研究図書館は、IAO 図書館のようにその名と機能を失わず独立性を維持できれば、一箇所に統合され共同管理下に置かれるメリットも多かろう。何よりも利用者にとっては快適な環境で必要な資料が何でも揃うのが望ましい。これまで閉鎖的だった研究機関やグランゼコールの図書館は、普通の大学図書館とのコラボレーションでその門戸を開き、より多くの利用者へのサービス改善が今後の重要課題になりそうだ。ただ、リヨンでは無難に対応できることが他地方でもできるとは限らない。小都市や逆に機関が数多く複雑なパリでは難しいかもしれない。それでも改革目標とされる「活力と魅力あふれる大学キャンパス」は、魅力あふれる図書館なしには成功しないだろう。社会経済事情が厳しさを増す今日、国の方針変更もありうるのだから、大学図書館は協力体制を堅固にしてさらなる飛躍にむけてチャンスを逃してはならない。

【注】

1) Renoult, Daniel (dir.) *Les bibliothèques dans l'université*. Cercle de la librairie, 1994. p.13,
Daumas, Alban. “Des bibliothèques des facultés aux bibliothèques universitaires”. *Histoire des bibliothèques françaises*, tome 3. Promodis, 1991. p.418

2) Renoult, 前掲書 p.16,

Daumas, 前掲書 pp.433-434

さらに Daumas, Alban. “Les bibliothèques d’étude et de recherche (1914-1945) ”. *Histoire des bibliothèques françaises*, tome 4. Promodis, 1992. pp.114-138

3) 岩崎久美子「フランス図書館行政の近代化」『国立教育政策研究所紀要』第 137 集 2008. pp.167-180 http://www.nier.go.jp/kyoutsu2/kiyou137-15.pdf ［参照 2010. 03. 24］

4) 1969 年に発表された M. C. Audet “Les bibliothèques universitaires de France ”, *Bulletin de l’association canadienne des bibliothécaires de langue française*, 15-1 に見られる指摘で多くの資料に引用されている。

5) Renoult, 前掲書 1) pp.20-29.

Pallier, Denis. “Bibliothèques universitaires : l’expansion ? (1945-1975)”. *Histoire des bibliothèques françaises*, tome 4. Promodis, 1992. pp.380-403

6) Dossier “Urgences universitaires”. *Bulletin des bibliothèques de France*, 54-6, 2009. http://bbf.enssib.fr/sommaire/2009/6 ［参照 2010. 03. 16］

7) 全国フランス大学図書館の共同カタログ http://www.sudoc.abes.fr/

8) Colas, Alain. “Administration centrale et bibliothèques universitaires”, *BBF*, 54-6, 2009, pp.6-11 http://bbf.enssib.fr/consulter/bbf-2009-06-0006-001.pdf ［参照 2010. 03. 16］

9) Inspection générale des bibliothèques. *Rapport d’activité 2007*. Ministère de l’enseignement supérieur de la recherche, Ministère de la culture et de la communication, juin 2008. pp.55-58 http://media.enseignementsup-recherche.gouv.fr/file/Rapports/90/2/rapport_annuel_2007_31902.pdf ［参照 2010. 04. 02］

10) 設立当時のリヨン東アジア研究所図書館については拙著「リヨン東アジア研究所図書館」『日仏図書館情報研究』25 1999 pp.30-36 を参照されたい。2002 年からヴェトナムを中心とする東南アジアにフィールドを広げ、中国語・日本語・ヴェトナム語資料を取り扱いそれぞれの言語専門司書がいる。

11) 日本では一般に高等師範学校と訳される Ecole normale supérieur : ENS はグランゼコールのひとつで現在はパリとリヨンにある。リヨンの ENS は 19 世紀末にパリに設立された初等教員養成学校が元になっているが、現在はアグレガシオン（高等教員資格）準備の専門学校である。1987 年に自然科学系が、そして 2000 年に人文・社会学系がそれぞれリヨンに移転し、大学改

革政策の一環で 2010 年 1 月から自然・人文・社会が統合されひとつのエコール ENS de Lyon となった。図書館も予算と人事が統合される。

12) PRES 形成や次節の自治大学政策は 2001 年に制定され 2006 年から施行された予算組織法 (Loi organique relative aux lois de finances : Lolf) を具体化するもので、その動向についての和文での紹介や論文も多数ウェブ上でアクセスできる。

- 船守美穂「フランス『研究・高等教育拠点(PRES)』形成の動向」東京大学国際連携本部 2007 http://dir.u-tokyo.ac.jp/Archives/kaigai/files/D-8-PRES.pdf ［参照 2010. 04. 16］
- 大場淳「フランスにおける国家予算制度改革と大学への影響」『大学論集』第38集 広島大学高等教育研究開発センター 2007. pp. 103-124 http://home.hiroshima-u.ac.jp/oba/docs/ronshu38.pdf ［参照 2010. 04. 19］
- 柴田浩呂『フランスの大学改革』（欧州科学技術・イノベーション動向報告）JST研究開発戦略センター 2008. 39p. http://crds.jst.go.jp/kaigai/report/TR/EU/EU20080515.pdf ［参照 2010. 04. 19］

自治大学化が進む中での図書館への影響については *BBF* 記事を参照

- Colas, 前掲書 9)
- Carbone, Pierre. “L’université à l’horizon 2012”, *BBF*, 54-6, 2009. pp.12-17 http://bbf.enssib.fr/consulter/bbf-2009-06-0012-002.pdf ［参照 2010. 03. 16］

13) リヨン大学ホームページ http://www.universite-lyon.fr/

14) 高等教育・研究省ホームページ http://www.enseignementsup-recherche.gouv.fr/

15) Opération campus関連ページ http://www.enseignementsup-recherche.gouv.fr/pid20637/l-operation-campus.html

文部科学省ホームページより「今後の国立大学法人等施設の整備充実に関する調査研究協力者会議」第5回（2009年6月9日）配付資料より参考資料7「フランスにおける大学キャンパス整備の状況について―オペレーション・キャンパスプロジェクトを中心に―」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/011/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2010/03/05/1269140_9.pdf

［参照 2010. 04. 19］

16) 自治大学認可の動向については高等教育・研究省ホームページに随時報告があり、日本学術振興会(JSPS)のウェブサイト海外ニュースページの抄訳報告も参考 http://www.jsps.go.jp/j-news/g_news.htm ［参照 2010. 04. 19］

【参考文献】

Camp, John F., 原豊訳「フランスの図書館と大学(1789‐1881)(その1)」『日仏図書館情報研究』10, 1984. pp.29-37

Camp, John F., 原豊訳「フランスの図書館と大学(1789‐1881)(その2)」『日仏図書館情報研究』12, 1986. pp.55-67

Casseyre, Jean-Pierre, Catherine, Gaillard. *Les bibliothèques universitaires*. Presses universitaires de France, 1996. 127p.

Daumas, Alban. “Des bibliothèques des facultés aux bibliothèques universitaires”. *Histoire des bibliothèques françaises*, tome 3. Promodis, 1991. pp.416-435

Daumas, Alban. “Les bibliothèques d’étude et de recherche (1914-1945) ”. *Histoire des bibliothèques françaises*, tome 4. Promodis, 1992. pp.114-138

Filippi, Dominique. “Quelques mots sur la situation des bibliothèques universitaires françaises ”.『日仏図書館情報研究』28, 2002. pp.7-23 (原豊訳「フランスの大学図書館の現状に関するいくつかの覚書」同誌 pp.24-35)

Gleyze, Alain. “Les années de crise des bibliothèques universitaires (1975-1990) ”. *Histoire des bibliothèques françaises*, tome 4. Promodis, 1992. pp.672-681

Minot, Jacques. *Histoire des universités françaises*. Presses universitaires de France, 1991. 127p.

Pallier, Denis. “Bibliothèques universitaires : l’expansion ? (1945-1975) ”. *Histoire des bibliothèques françaises*, tome 4. Promodis, 1992. pp.380-403

Renoult, Daniel (dir.) *Les bibliothèques dans l'université*. Cercle de la librairie, 1994. 358p.

論文集*Histoire des bibliothèques françaises* 書誌詳細は以下のとおり

Varry, Dominique (dir.) *Histoire des bibliothèques françaises. III, Les bibliothèques de la Révolution et du XIXe siècle : 1789-1914,* Promodis – Cercle de la librairie, 1991. 671p.

Poulain, Martine (dir.) *Histoire des bibliothèques françaises. IV, Les bibliothèques au XXe siècle : 1914-1990,* Promodis – Cercle de la librairie, 1992. 793p.

山本みゆき「リヨン東アジア研究所図書館」『日仏図書館情報研究』25, 1999. pp.30-36